

〔Ⅱ〕 学級集団の形成とその組織化

— 中学の学級担任の立場から —

丸 山 豊

1 はじめに

今さら、「学級集団をどうつくるか」といったテーマで本論を書くのはつらい。他中学の教師たちは、私以上の実践家であり理論家でもある。しかし、本校では集団づくりの視点からの学級経営が十分確立されていないと思うし、生徒、教師共々、学年2クラス、全校6クラスという小人数、小規模に甘えるきらいがある以上、また、私の学級経営の方向、実践の過程が、むしろ一般的で常識にさえなっていることをあえて指摘していただく意味においても、本校着任以来（'76年度）4年にわたる中学担任の体験をまとめてみたいと思う。
(注1)

2 中1 A この一年の歩み（1980年度）

昨年度担任した中1 Aは、私の教師歴の中でも最も印象深いクラスだった。男女の仲がとてよく、掃除も一生懸命にでき、何より生徒自身が中1 Aの一員であることに誇りを持っていた。

私の学級経営の方針は常に、

- (1) 生徒により多くの実践活動を体験させたい（集団活動の喜び）
- (2) その活動を通して民主的な自治集団を育てたい。
- (3) 自己の成長は、なかまの中にあり、自分の成長は他をも成長させることを発見させたい。（集団のすばらしさ）

の3点ぐらいで、あとは余り意識していないが、学級が一つの集団である以上、その集団の質を高めることが担任の主な任務と考え、学級の組織化に頭を悩ませてきた。それは仲間意識をどう育てるかにつながる。

(1) まず、班づくり

学級を6～7の班に編成する。班はすべての活動の基礎。男女混合でつくり、班によって教室の席も決定した。班員構成は、身体的状況を考慮して、最初は教師が決める。班長は、この一年で大半が経験できるよう考慮する。次第に立候補制をとることは、いうまでもない。

(2) 学級の係活動は班で分担

学級目標を達成するために、どんな活動をしたらよいか、班会議を経て提案させた。中1 Aの場合、7つの班に7つの仕事を考えた。どの班がどの仕事をするかは、各班の総意に基づく立候補で決定した。

各班の仕事分担

- ① 学習班 A …… 日々、学習に対する取り組み、自習体制、教科諸連絡、提出物
- ② 学習班 B …… 定期テストにむけての取り組み、週一回課題プリントの自主作成採点、班別平均点の算出など
- ③ L・T(学活)文化班 …… L・T活動の文化的な内容を運営
- ④ L・T、スポーツ、レク班 …… スポーツやレクリエーションの運営
- ⑤ 広報班 …… 学級新聞などの広報活動
- ⑥ 掲示班 …… 掲示全般
- ⑦ 厚生班 …… お茶の運搬、牛乳、ジュースビンの管理

前期は 学習班 A・B が一つで、代わりに うたごえ班をおき 厚生班はなく 6つの分担を7つの班が立候補して競い合って分担をした。毎週各班の仕事点検をし、批判された班は、仕事につけないという制度をとった。ところが男子の一部が仕事のない状況を逆に望み、活動の足をひっぱりはじめた。うたごえ班が後期になくなったのは、S・T後にみんなで歌う時間的余裕がないのと、合唱コンクールで十分歌ったということから後期はなしとした。

(3) どんな班活動がなされたか—学習班の活動より— —学習班 A—

まず、学習態度について各班で話し合わせ、クラスの問題点を明確にした後、「学習班 A」がその解決のために具体的提案をし、クラスの運動にしていく方針をとった。

一例をあげると、「忘れものが多い」という実態が問題点としてだされ、「学習班 A」より「忘れものをなくすために班別と個人別の一覧表をつくりたい」という提案になった。掲示班が一覧表を作成、毎日 S・T 時に学習班のメンバーが点検して記入し、その結果

を広報班がプリントして配るといった活動になっていった。

教師の側から提案することもあった。中学担任会でとりあげた「チャイムが鳴り終わるまでに着席しよう」とか、私が提案した「朝・昼の放課は、なるべく外へ出て遊ぼう」などである。しかし生徒から提案された方が、各班必死になるし、競争がある意味では集団の質を高めていくことがわかる。この何でもない活動が自分たちの手で実行され、目的を達成することにより生徒は班活動に積極的になっていく。つまり「自治」の第一歩である。

自習時間の確立も重要な自治活動としてとらえさせたい。「自習がきちんとできるクラスは、学校中で最高のクラスになれるんだ。」という目標から、自習時間の内容、指導を学習班にまかせていった。こうした観点からいうなら、第6限カットで早く下校させること（従来行なわれた本校の慣習）は逆の意味で問題が多い。担任や副担が時々のぞいて、評価してやらないと、単なる班活動では長続きしないことは、いうまでもない。

一学習班B一

テスト、およびクラス課題としての家庭学習の取り組みが中心となった。週一回の課題プリントは、国社数理英5科目のどれかであり、担当班はそれなりに頭を痛めていた。各班別に集計、採点を放課にしS・T時に発表されるわけだから、班のまとまりが一目瞭然となる。しかし、全く理解できない生徒にとっては、このプリントは苦痛きわまりない。そこで、班学習をねらうわけだが、教科指導の分野となり、各教科に班学習の視点があれば、学級活動とかみ合って学習集団へと発展するのだが残念ながらできなかった。

定期テストへ向けて、各班が一教科ずつ担当して、まとめプリント、予想問題を出したことがある。雰囲気づくりがねらいだが、プリントに頼って、それ以上何もしなかったという生徒がいた。

(4) 掃除は全員清掃で、点検は日直班で

掃除が徹底しない理由に、全員で取り組んでいないことがあげられる。清掃も学級活動の一環と考えるなら、「掃除なしグループ」の存在は問題である。清掃活動の中にも集団づくりの要素が多い故に、全校的な問題にいずれはなりそうだ。各班の人間関係が諸活動を通して成立してくれば、清掃も男女協力してできるはずである。清掃区域を6区分とし、残りの一班は日直班として組んだ。従来、点検を日直班にまかせたが、清掃が徹底しないことが多かった。昨年度の中1Aは全員清掃を導入したことで、少しは前進がみられたようだ。つまり、班日直を形式だけ導入しても、クラスの1/3以上が掃除免除の状態では、から回りするだけだし、掃除の時のみ班が活動する（日常の班活動がな

くて）のでは、全く意味をなさない。

清掃分担

| | |
|-------|--------------------------------------|
| ○教 | 室…教室内、机の上のそうきんがけ ゴミ捨て |
| ○廊 | 下…廊下、落物陳列ケース、流し、掃除 道具入れの整頓、ロッカーの上 |
| ○環境整備 | …掲示物、ブラインド、前後黒板 教壇の上雑布がけ、側面の汚れ落し |
| ○便 | 所（略） |
| ○階 | 段（略） |
| ○外 | 庭 毎日少しずつやる |

清掃区域を細かに分担することで、清掃もれをなくすることができる。細分化しすぎると班活動の意味が消失するし、仲間意識が育たない。清掃の仕方、手順を示し、掲示しておくことで日直の点検項目がはっきりしてくる。この7分担を各班で一週交代で実施する。この中で最も重要な役は日直班である。

(5) 日直班は何をする？

多くの実践では「日直」が集団づくりの中心とされ、てきた。教師の管理のための日直にならないため、相互批判やリコール制で、民主主義の在り方を学ばせようとする立場である。

中1Aでは、「日直班」は、S・T運営、掃除点検、を常時活動とし、クラス目標が設定された場合、その点検活動も組み入れてきた。

班日直であるから、各清掃班に一人ずつ点検として清掃指導にあたる、すべての権限を日直に与え、日直は自分の責任において清掃終了を告げ担任に報告する。S・T、で点検結果が発表される、日直の点検、態度に問題があれば反論が許される。一週間交代で、清掃がローテーションする毎に日直も交代する。7週間で全員が日直を経験すると点検と清掃内容がかみ合ってくる。

中1の場合は、厳しすぎたり、甘かったり、日直班の指導は今後の課題でもある。

(6) 「班替え」一席替えは、いつごろか

昨年は学期2回、計5回行った。班活動が定着すると生徒は席替えとはいわず、班替えと呼ぶ。学期始めと中間テスト終了後の一つの目安とした。しかし、なぜ「班替え」が必要なのか、班替えの条件は何かを明確にできなかったため、定期的な行事と化した。

(7) 帰りのS・Tは「学級活動」の重要な場

本校は、朝のS・Tがない、S・Tとは⑤時間⑥級⑦動であり、単なる連絡に終わらせてはならない。また、わずか10分しか日課にないのも、「S・T」の問題を浮きぼりにしている。

S・Tのプログラム化を以前から実施してきたが、ど

うもうまくいかない。S・T時に班会議を設け、各班の一日の生活の反省を発表し、学習の整理、課題の確認、班活動の点検を帰りの会だけで行うには時間が無いし、周辺のやかましきに加え、部活、生徒会、会議等で掃除がおろそかになり、十分S・Tの役割を果せないままである。他の公立中のように本校も朝のS・Tの必要性を感じず。

中1 Aの場合、1.あいさつ 2.諸連絡 3.日直班より 5.担任 6.うたごえ 7.あいさつのパターンであった(うたごえは前期のみ)

(8) 班長会は クラスの執行部

クラスを集団化し組織化していく時の最高の執行機関は班長会である。班長会は週一回、土曜の12時から昼食を共にしながら開いた。その内容をかかげる。

- 各班の週の反省(班ノート、提出物、授業、清掃)
- 日直班としての一週間の評価
- 翌週のL・T計画、清掃、日直の確認
- 各班の仕事分担の点検
- クラスの問題

班長会を開催しない、もしくは開いても担任が出席せず生徒にまかせるのを自主性なり自治とするなら、集団づくりは見事失敗する。最近の生徒の傾向として、民主的な討論を重ね検討し、原案を作成していくという地道さを嫌い、安易な方向に必ず流れてしまう。そこに担任の指導が入らないと、前向きに考える生徒は少数派となり、多くは「何をやってもムダ」という多数派を生みだしてしまう。

土曜の第4限の班長会は、雑談も交え、楽しい会として定着していった。そこでは、様々な問題が出され担任が掌握できない部分を知ることができた。担任と生徒という単線ルートではなく、生徒集団の問題として投げかけることが可能になっていく。

班長が一部の者で固定化したり、すべてを班長会で最終決定し クラスには、その報告だけになると「何でも班長会で決めてしまうのか!」という反発を招くことになる。それでは、民主主義に基づいた自治を学ばせるどころか 上意下達を強いる。班長会が、班会議を経て班員の意見を十分に反映しているなら、問題は少ない。

(9) 班会議が活動の基本

各班のそれぞれの仕事、活動はクラスの中で多様となる。班会議の重要性はわかるが、毎日のS・Tではムリ。常時班の話合いがなされるといいのだが、決してうまくはいかない。7つの班に担任が出席することもできない。7つの班に担任が出席することもできない。しかし、やらないと集団づくりは崩壊する。時間的保障を次のように与えてみた。

- (1)道徳時に、一斉に班会議をもつ

- (2)班面接をおこない、班を担当として点検する
- (3)昼食を班別会食にして、そこで班会議をする
- (4)土曜のS・Tを10分位延長し、一週間の反省、班の提案を中心に班会議をもつ

(1)、(2)、(4)は担任の指導が可能であるが、(3)はむずかしい。「昼食は各班で食べよう」という目標を設定し、しばらくは、私が教室で共に昼食をとるという方法にした。

担任としては、その班の人間関係、仲間意識にもっとも気をつかう、そこで「班ノート」は集団づくりに欠くことのできないものになってくる。

(10) 仲間意識は、班ノートで

班ノートは様々な活用ができるが、集団づくりを指向しないクラスでは、その必然性もなく、長つづきしない。集団づくりの要として班ノートを生かしたい。

毎日担任が点検し、赤ペンを記入することによって担任との交流ができる。

(11) アンケートと文集にみられる中1 A

仲間づくり、学級集団づくりの手だてについて、昨年度の中1 Aの一年をふりかえりながら実践を述べてきた。

ここで、生徒指導研究グループ(米山教官)の「学校生活に関するアンケート」にみられる中1 Aを考えてみたい。

| アンケート内容 1981.3.17 中1 A | 学校生活は 楽しいか | | | | クラスの諸活動は 充実しているか | | | |
|---------------------------|---------------|-----|-----|-----|---------------------|-----|-----|-----|
| | 男 | 女 | 計 | % | 男 | 女 | 計 | % |
| 大いに | 136 | 609 | 377 | 733 | 136 | 478 | 311 | 778 |
| かなり | 455 | 260 | 356 | | 455 | 478 | 467 | |
| わからない | 364 | 130 | 244 | | 182 | 0 | 89 | |
| あまり | 45 | 0 | 22 | 22 | 227 | 0 | 111 | 133 |
| 全く | 0 | 0 | 0 | | 0 | 43 | 22 | |

学校生活にも、クラスにも、7割以上が満足していることを示している。ここで顕著なのは、男女差がはっきり表われている点である。学級に対し女子は1人を除く全員が充実感を持っている。(1981. 3.17 現在)男子は6割程度に比べ、女子の比率が高い、裏を返すなら、中1 Aは、女子のチームワークに優れ、女子主導型のクラスということになる。担任としては、男女等しく集団づくりに力を注いできたつもりである。

三学期の最後の球技大会は、見事男女共完敗した。学級集団づくりをすすめて、最後の話の段階での敗北、それも完敗は痛手である。むなしさのみが残る場合が多い。特にテリケートな女子の場合、責任転嫁と

なり分裂していく。

春休み後発行の中1文集『思い出A & B』の中で彼女たちの多くは、球技大会での敗北を綴っている。

古川…私達は少しでも強くなろうと何度も話し合いをしました。大会の前日にも残って練習をしました。B組も練習していたので20分ずつにしようとして約束しました。B組が2～3分オーバーして終わり私達が練習し始めてから10分位たった頃、北田先生が来られて「練習は終わり」と言われました。A組のみんなは教室に帰りながら「せっかく練習しようとして張切って来たのに」とむっつりしている人、ぐちをこぼしている人、その時です。だれかが私達はスポーツマンなんだ、さっぱりしようよ」と言いました。みんな「そうだ、そうだ」とうなづき、教室についてからはみんな明るくなりました。それから最後の話し合いをしました。(中略)結果はやっぱりB組の勝ちでしたけれど、みんな一生懸命やったのです。悔いはありませんでした。それにこの球技大会でクラスは前にもまして団結したようです。

金山…せいーばい頑張った……(中略)どうしても勝てなかった。(中略)本当に、本当にいい球技大会だった。負けちゃったけど…。何かよくわかんないけど、何かつかみとったんじゃないかな。それに一まわり大きくなったような気がする。

梅……中1時代の数多い思い出の中で、特に心に残っているのは、球技大会の時の事です。(略)負けてしまったけど「よかった」と思える思い出です。

再びアンケートに戻ろう

○入学以来特にすばらしかったと思うことがあるか

| ある | | ない | | (%) |
|------|------|------|-----|-----|
| 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 54.5 | 95.7 | 45.5 | 4.3 | |

以上のような、この一年の歩みであった。担任としても、この一年、学校生活が非常に楽しかったし、彼らの入学以来、特にすばらしかったと思うことが何回もあったことを付け加えておく。

3 学級集団の組織化をめざして (学校行事、学活から)

(1) 学活を通してどう集団を育てるか

学活(いわゆるL・T)の指導のあり方に様々な問題が指摘されている。ここでは、生徒の自主活動の一

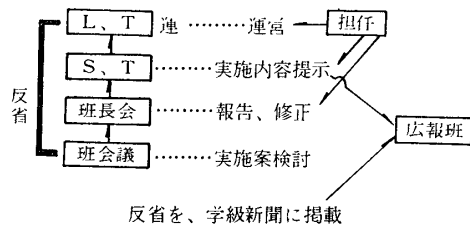
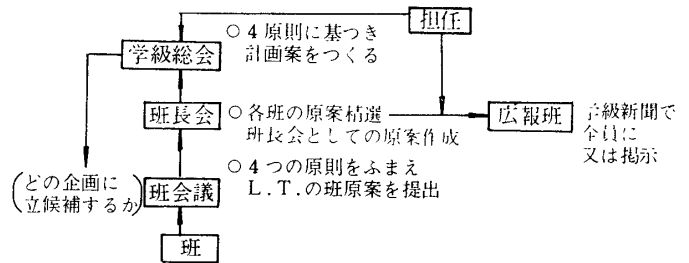
面としてのL・Tに触れてみたい。

L・T計画の4つの原則

1. クラスのまとまりが前進すること
2. 男女協力して行うこと
3. 活動がかたよらないこと
 - a 文化的活動
 - b 体育的活動
 - c レクリエーション活動
 - d 学習活動
 - e その他
4. 集団で計画、運営をし、必ず反省を行う

① 班を土台としたL・T運営('77 '78 '79年度の例)

① L・T原案作成まで



② 過去4年間のL・T内容

- 文化的活動
 - ・うたごえの会
 - ・班新聞コンクール
 - ・クラス弁論大会
 - ・討論会(恋について、戦争について)
 - ・教生とお別れ会
 - ・教生をかこんで座談会
 - ・班対抗 百人一首大会
- 体育的活動 (男・女混を原則)
 - ・バレエ、バスケット
 - ・二人三脚サッカー、クラス駅伝
 - ・ソフトボール、クラス水泳大会
 - ・ドッジボール
- レクリエーション
 - ・クリスマス大会
 - ・学内オリエンテーリング
 - ・鬼ごっこ(手つなぎ鬼、ドロジュン)
 - ・レクリエーション大会
- 学習的活動
 - ・定期テストにむけての学習会

- ・ 集団読書会
- ・ 転校生送別会
- ・ 調理
- ・ クラス遠足
- ・ 焼きイモ大会

クラス弁論大会は、過去4年、三学期に担任提案として実行しているが、自我の確立、批判力、進路等の面からも意義ある内容と思う。

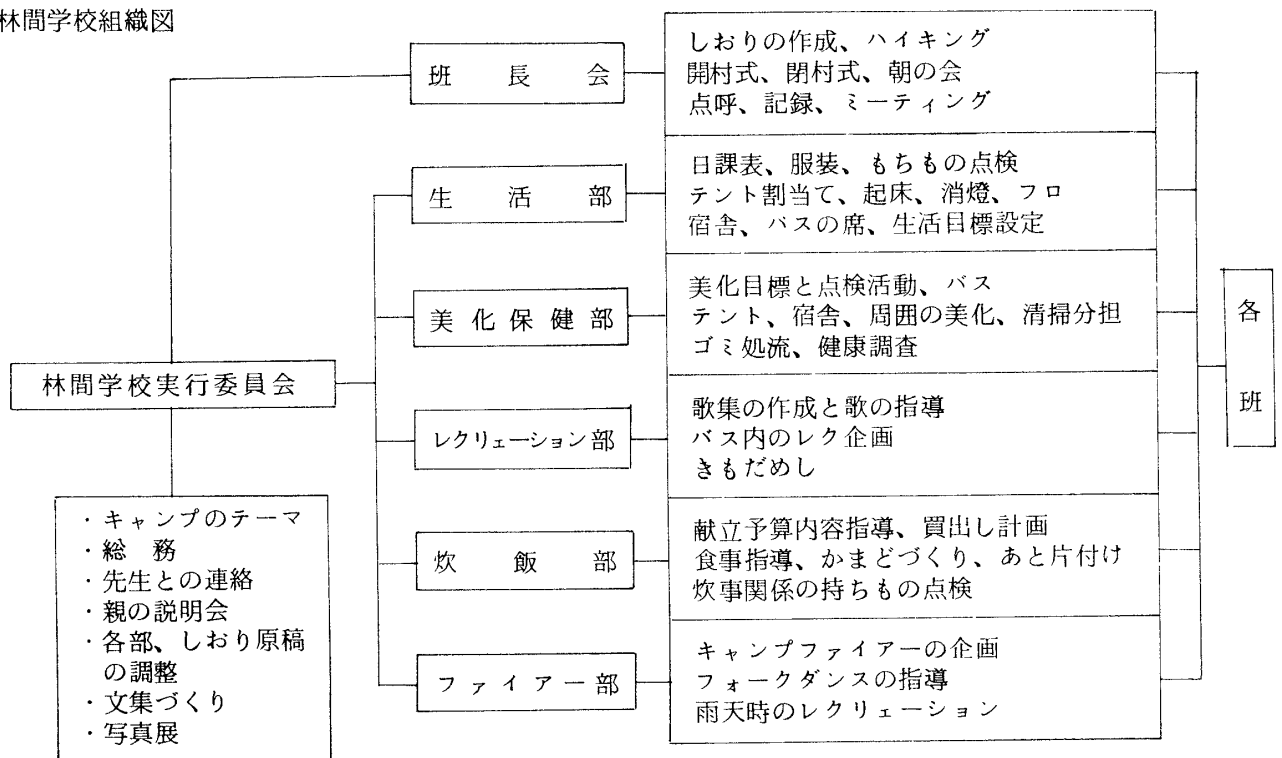
これらの内容は、いずれも日常の班活動の結果として充実していくもので、L・Tのための形式的な班は逆に請負的になり、ただ単に楽しむためのL・Tになりかねない。「みんなで力を合わせるって、こんなことなんだなあ」という体験こそが、各種の学校行事を

主体的に取り組ませる原動力につながっていく。(注2)

(2) 学校行事と学級の組織化

各種の学校行事は、集団づくりの全校へむけての出発点にもなる。班を1つの核として動き始めた生徒たちにとって、行事は「私たちのクラス」としての自覚をもつ機会であり、生徒の変革の場でもある。全校集団づくりという視点で行事をとらえるなら、単に行事の数減らす根拠は何もない。行事も授業であり、そこから学ぶことは、断片的な知識より重要なものである。学校行事の成功は、全校集団が存在するかにあり全校集団は学年集団に支えられる。学級集団の育成のねらいは、ここにある。

林間学校組織図



—各班の内部分担—

(一人一役)

| | | |
|----|--------|------|
| 班長 | 生活係 | 1～2名 |
| | 美化係 | 〃 |
| | レク係 | 〃 |
| | 炊飯係 | 〃 |
| | ファイヤー係 | 〃 |

① 林間学校を軸とした組織化の例

次に学校行事の中でもっとも学級集団の質が問われると思う林間学校を例にとり、学級組織のあり方を集団づくりの観点から述べたい。(’77、’78年度の中2担任の時)

- (イ) 班づくり 男女混合、好きな子同志は避ける。クラスの班体制と林間の班を同一にする(7月以降)
- 班会議が昼食、S・Tどこでもできる体制、各種の

活動で人間関係をスムーズにしておく。班ノートの活用、内容はキャンプに向けて。広報班もキャンプ速報で雰囲気盛り上げる役目、班内一人一役ですべての情報が各班で掌握できるように。

(ロ) 各部会と実行委員会 キャンプまでの日程、各部の仕事の進み具合の点検、部会はL・T利用で一斉に行う。

(ハ) ミーティングのもち方 現地でのミーティン

グは二段階になる。まず各班のミーティング、次に各部のミーティング、つまり計画段階での班会議と部会である。

以上のような組織が動きだすか否かは、4～6月までの学級集団の質に関係してくることは、いうまでもない。これだけの組織になると、各部門で教師の指導性が当然要求される。各種行事における生徒の自主的活動を求めるには、学級の集団化と同時に、教師集団の問題になってくる。修学旅行は、この発展として考えることができるし、学校祭に至っては、単に生徒部の教師集団の枠をのり越えないと、行事内容が形骸化する恐れさえある。生徒が陥入りやすい「低次の楽しさ」を容認しないためにも。

4. おわりに

このあと、学級新聞、文集づくり、学級通信等の学級文化に触れる予定であったが次の機会にゆずることにしたい。

中学生は放っておいては育たないし何をするかわからない年でもある。だからこそ正しい指導が必要で、指導の仕方では、すばらしい力を発揮するし、成長する。

我々は幸か不幸か高校生になった彼らを見ることが出来る。彼らは高校の早い時期に集団づくりの困難さを体験し壁をのりこえようとして大半は挫折、妥協していく。それも一つの成長といえるが、彼らを支えて

くれる力があつたらとも思う。私は今年度高3の担任となった。クラスから眼をそむける生徒を前に担任の力ではどうしようもない現実と直面し、あせっている毎日である。

高校での実践は他に待つとしても、本論は、形式、組織だけを取り入れるための方法論では決していない。また、生徒の手にすべての委ねる中からは、自治は生まれないし自主性も育たない事を強調してきた。

「なぜ集団か」「なぜ班をつくるのか」といった集団づくりの原点に立ち返る事こそ、必要なのではないか。

(注1)

| | |
|--------|------|
| 1977年度 | 中2 B |
| 1978年度 | 中2 B |
| 1979年度 | 中3 B |
| 1980年度 | 中1 A |

(注2)

これらの活動内容は進級につれ上級学年に広がっていったが、中学の体験を土台にして発展したものは少ない。

(注3)

1979年度の中3は、中2 Bの林間学校の経験を修学旅行に生かした。